第18回日本全身咬合学会学術大会

18th Meeting of the Japanese Academy of Occlusion and Health

全身機能から咬合の重要性を考える

プログラム・抄録集

Program and Abstracts

JAPANESE ACADEMY OF OCCLUSION & HEALTH

後援／新潟県歯科医師会

会期：平成20年10月25日（土）・26日（日）

会場：日本歯科大学新潟生命歯学部　講堂

O-7　一般口演　25日　12:05～12:20

視診の役割

○三宅正純，香宗我部亜人，兼本英志，鈴木理皓，波多野一

あいび矯正・歯科（小田原市）、リモーネ矯正歯科（静岡市）、香宗我部歯科（東京都）、エイジ歯科（東京都）、りこう歯科（東京都）、波多野歯科（東京都）

Aibi Dental Clinic (Odawara City), Limone Orthodontic Clinic(Shizuoka City),Kousokabe Dental Clinic(Tokyo), Eiji Dental Clinic (Tokyo), Rikou Dental Clinic(Tokyo), Hatano Dental Clinic(Tokyo)

[はじめに]

アムステルダム大学解剖学教授のルイスボルクの「胎児化説」によると、猿は成長過程で、脊柱尾部や膣が真っ直ぐになるのであるが、人は、大人になっても胚期の脊柱尾部の湾曲状態は変化せず、又、顎が前方に突き出さず、顔面が平坦で後退傾向の幼形のまま性的に成熟するという。その為、姿勢が悪くなり腰、頚部痛、顎が下がっているので、そのバランスを取ろうと頭を前に出すので、それを支える頚部の筋肉が疲労し、頭を前に出したりしていると姿勢が悪くなり、顎が後退し、顎関節症や不正咬合に発展させる。痛みは、危害のシグナルであり、痛さによって迫りつつある危害を認識し、危害から身を守る。痛みの認知は、視床において為され、痛みの局在、侵害の程度は、大脳皮質で為される。顎の痛みには、1.歯牙、2.顎関節、3.全身、4.心理の４つの関与因子が考えられる。痛みの発生の誘因がサインとしてこの４つの中に見られる、あるいは、痛みの反応がサインとして出現する場合があり、痛みの患者さんの体を診る、視診が重要になり、我々歯科医は、患者さんの出すサインをどう判断し、どう対処するか考えてみたい。

[結果、結論]

たとえば、痛みの発生に器質的、あるいは機能的因子のみならず、心理的因子が誘引になっている場合もある。「かみ合わせが悪いから」といって来院する人の殆どは器質的な変化そのものではなく、その事実に対する心理から痛みを発生させていることも多い。大人であるにも関わらず、付添の人が病状を説明したりし、周囲の行動に問題があるのかもしれない。人の行動は随意的で、意志的行動であるのでオペラントである。周囲の反応で強化され、痛みがあり続けること自体がオペラントである。痛みを強化するのは、患者さんと家族との関係や歯科医との関係である。痛みを維持し続けるペインビヘイバーを減少させ、痛みを続けるというオペラントの消去が必要になる。周囲の反応が患者さんの反応も修正することになるので、患者のみならず、その周囲の家族をも見ることが必要になると思われる。